

ジンコソーラー、2020年モジュール出荷18~20GWへ 2019年日本シェアトップ、銭晶副会長インタビュー

ジンコソーラーは、2019年に日本向けモジュール出荷量が1.2GWに到達し、国内シェア首位を獲得した。同社では、2020年の世界での太陽電池モジュール出荷量は18~20GW規模に達することなどを想定している。同社の今後の新たな製品展開や市場展望、また研究開発などの取り組みについて銭晶副会長にお話を伺った。

——2019年のグローバルと日本向けのモジュール出荷量を教えてください

銭晶 2019年のモジュール出荷量は、グローバルで14.0GW~14.2GW、このうち日本向けは約1.2GWで、日本市場ではシェアトップを獲得した。日本での出荷量のうち産業用向けは7割で、住宅用向けは3割を占める。また2019年のグローバルでのモジュール出荷量は、当初の予測を上回る業績を実現できたものと評価している。

——最近のコロナウィルスによる影響は

銭晶 コロナウィルスは中国市場だけではなく、世界市場にも影響を与えるものだ。これに対してジンコソーラーは、中国政府の呼びかけに応じるとともに、粛々と工場の操業を再開している。2020年がスタートして2カ月以上が経過し、現在は当初の計画通りの事業進捗となっているが、コロナウィルスの影響で市場の反応に応じ調整を

行う可能性は存在する。

——日本向けのモジュールの新製品はどのようなものがありますか

銭晶 2月末に日本で開催されたスマートエネルギーWeekでは、新型のタイガー・モジュール(Tiger Module)をアピールし、最大出力475Wに達する「Tiger mono-facialモジュール」などを展示した。同製品は、タイリングリボン(Tiling Ribon)技術、ハーフセルを採用し、モジュール変換効率は最大21.16%を実現している。またジンコソーラーでは、両面発電モジュールの「Swanモジュール」の販売にも注力している。Swanモジュールは、両面受光型技術とともに、裏面にデュポン製の透明パックシートを採用している。水蒸気の排気性に優れ、長期の耐候性と高い透明性を維持できるため、水上設置などの用途にも最適なモジュールとなっている。透明パックシートにより両面ガラスモジュールに比べたときの軽量化も実現し、変換効率、年間発電量、信頼性、均等化発電原価などの様々な面が高く評価されている。発売から6カ月でSwanモジュールの世界での累計出荷量は1.7GWに達した。

——日本では脱FITに向けた議論が日々進んでいます

銭晶 日本の太陽光発電は、売電用途から自家消費に転換する過渡期にある。自家消費案件について、ジンコソーラーは、日本の総合商社や大手E



銭晶氏(ジンコソーラー提供)

Cサイト運営会社などとも提携しており、年内にはあるプロジェクトについて、新たに公表・リリースできると考えている。

——中国の市場環境はいかがですか

銭晶 中国は重要な市場としてジンコソーラーにとっても大きなウェイトを占める。世界市場から見ると、2020年中国また米国といった国々が現在の重要な市場となっている。一方で東南アジアなどの新興市場や、欧州市場の回復によって、市場の集中の緩和も進んでいる。

——中国では宇宙用途向け太陽電池の開発へ、上海空間電源研究所と提携協定も結びました

銭晶 宇宙用途向け太陽電池の開発へ、上海空間電源研究所とは、戦略的な提携枠組み協定を締結しており、協力しての開発を現在進めている。また宇宙用の太陽電池の開発を進める一方で、通常の地上でのメガソーラーや住宅向けのモジュールの製品開発を行う時にも宇宙用途の太陽電池の開発を通じて得られたノウハウは活用していく。



ジンコソーラーのモジュール